

ひと街しごと

平成14年(2002)9月1日(年4回発行)

発行：(株)印刷紙工
札幌市中央区南15条西18丁目
Tel(011)561-3597

編集：ひと街しごと刊行会
札幌市中央区北1条西17丁目
北海道不動産会館4階
(有)編集工房海内 Tel(011)623-6652

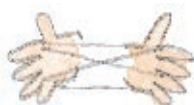
No. 1



目が暮れるのも

忘れま...

歴史はいつも未来へのみちしるべです。
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが、
少し合わなくなってきたと感じ始めたら、
思い出カードを一枚一枚めくっていきましょう。



日本でラジオ放送が開始されたのは大正十四年(一九二五)。生まれたときにはそのラジオさえなかった世代から、いまはパソコン、携帯電話に囲まれて育つ世代へ。この間の子供たちの遊びの変遷は、とくに戦後、大人たちが本当の豊かさを見失っていった歴史と重なります。日が暮れるのも忘れて夢中になって遊んだあの頃の子供たちには、無から有を生む創造力がありましたね。

思い出カード

遊び編



昭和47年ころの石狩川渡船場(本町側)
フェリーと客船の発着で大にぎわいだった
(石狩市提供)

人影も少ない石狩川旧渡船場一帯



石狩川渡船

車の波に消えた
風物詩、
人馬を運んだ
無料の国道

昭和五十三年（一九七八）三月三十一日。
この日の終航式には
札幌からも大勢のファンが駆けつけたほど、
惜しまれながら消えていった石狩川渡船。
わずか四半世紀ほど前のことですが、
遠い昔の出来事のようにです。

かつては石狩町（現石狩市）の中心
だった河口の本町一帯。渡船場があった
のは、日帰り客で終日にぎわう番屋の湯
とは反対側。商店街の裏手を流れる石狩
川に突き出した、数本の木製棧橋の最下
流部あたりです。

この渡しは江戸時代末ころに始まっ
ており、明治に入るとすぐに官営に。
石狩町営の時代が長く続いた後、昭和
二十八年に札幌―留萌間の道路が二級国
道二三一号に昇格したとき、渡船場もそ
の一部として札幌開発建設部管轄とな
りました。

最盛期には客船、車運船（フェリー）、
馬船など四隻が、対岸との二百四十
時間にして十分足らずの距離を往復。全
国でも珍しい船が結ぶ無料の国道とい
うことで、観光客の人気を呼んだもので
した。

しかし風物詩とはいえ一度に車五、六
台しか運べなくては国道は大渋滞。押し
寄せるモーターゼーションの波には勝て
ませんでした。昭和四十七年八月、石狩
河口橋の一部開通で車が通れるようにな
ってフェリーは廃止。客船だけは残り



右：船をけい留した鉄柱だろうか

「渡船」の文字が読めるが

気付く人は少ない

左：ここが船着場のどの部分だったのか

上の写真と比べながら

昔をたどるのは少し寂しい

ましたが、こちらも利用者の減少で昭和
五十三年三月に役目を終えたのです。

どこにでもある文明の必然。でもど
なにのんびりした時代があったのかは、
昭和二十九年九月の料金が表示していま
す。大人五円、小人三元、牛・馬二十
円、馬車・馬そり五十円、リヤカー十円
……。渡船を復活してほしいという声も
聞こえてきます。

来た道、 行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ——
スローコミュニケーションを求めて。

狸 小路六丁目ほど近い、ビルとビルにはさまれた小さな店舗。こんな街の真ん中でいつも客の姿の絶えることのないのが「細江釣具店」です。

細江和広さん(六)がこの店を始めたのは昭和四十二年(一九六七)。当時としては珍しい脱サラ、三十三歳の決断でした。それから三十五年間、毎日釣り人と接し、また日曜日には自らも海に山に竿を振りながら、釣りの変遷を目の当たりにしてきました。

細江和広さん——札幌市細江釣具店

「三十五年間、 釣りと釣り人を 見てきた」



道具の素材が改良され、釣り方が大きく変わり、人口も増えました。しかし何といても同業者の減ったことが寂しい限り。「開業当時は組合に加入している店が五十軒はあったでしょう。それが十軒あるかないか」。大型安売り店の影響は他の商店と同じです。

大型店にはないやり方をと細江さんが取り組んできたのが、船釣り、磯釣りなどの様々な仕掛け作りポイント、エサ、そして仕掛けは釣りを楽しむ三天要素です。経験を踏まえた、よく釣れるオリジナルがファンをここまで離さずにきました。そして品ぞろえの工夫、釣りを主催し事務局として東奔西走するといった努力も、長く続いている原因でしょう。

街のど真ん中のビルの谷間の小さな釣具店
よく釣れる細江式仕掛けはここから生まれる



細江さんがいま心を傷めているのは釣り人のマナーの低下。海山を問わずゴミ、釣り糸類の投棄が目に残ります。「数よりの質。昔は納得のいく釣りができれば引き上げたものでした。楽しく遊ぶ場所はきれいにしなければ」。釣りひと筋はすべてに通じます。



本欄への自薦、他薦を
お待ちしております。

ま つすぐ行けば石狩灯台という弁天歴史通りの途切れる地点を日本海側へ向かい、砂利道を進むこと五百メートル丘が一段低くなったところに赤いトタ



古いながらもどっしりした構え

「こんな浜辺の 一軒家、 どこにもないよ」

相原武典さん——石狩市鮭鱒料理あいはら



ン屋根の一軒家があります。相原武典さん(六)はこの「鮭鱒料理あいはら」の二代目当主。建物は、隣の厚田村でニシン漁師だった父が昭和二十七年(一九五二)、前浜でのサケの漁業権を得たときに建てた新巻の加工場です。料理好きの母がここでサケ料理を客にふるまったのが店のそもその始まりで、正式に店を構えたのが昭和三十九年。札幌市内のホテルに勤務していた武典さんが、手伝うようになったのは昭和五十八年からです。

コースメニューを作ったり、四月から営業を開始したりと武典さん流に工夫も凝らしてきましたが、バブル崩壊以降はかつてほどの売り上げに達することはあ

りません。それでもこの店を続けているのは、こちらも二代目、三代目になる昔からの客が石狩のサケの味を求めて来てくれるから。半分以上は若い本州客というくらいに道外にもファンが増えました。石狩川河口近く、ハマナスが咲いて、波の音が聞こえてくる。「こんな素晴らしい自然の中で食事ができるなんて、日本中さがしたってないでしょう」。

目下の悩みは傷みが激しくなった建物の改修と後継者。工事の方は来年にも取りかからなければなりません。その範囲は子供たち次第とか。

長男は飲食業には興味を示さず、期待をかけるのは「二年半のカナダ留学で人間がひとまわり大きくなった」と目を細める長女。「自分も七十過ぎまでは現役でやるつもりだけど、娘がその気なら二、三十年はびくともしないものにした」と青写真を描いています。



ハマナス咲く砂丘にポツリ昔からのファンが足を運ぶ

本・づ・く・り 相談室



会社の 創立30周年で 記念誌をつくりたい

Q 私の会社は来年10月、創立30周年を迎えるので、記念誌を作ろうという計画が持ち上がっています。その準備をまかされましたが、普段の業務とは異なり、どうすればよいのか見当が付きません。

A 企業や団体の周年記念誌づくりで肝心なのは①内容②予算③発刊日一の3点。内容は、それまでの数十年の歩みを社会経済情勢や業界の動きとともにたどるページをメインにするのが一般的。これに年表、座談会、寄稿、写真・資料

類などが加わります。予算は、印刷料金がページ数、部数などで変わってきますし、不慣れた作業ですから外部の専門家にスタッフに入ってもらっても普通のこと。それらの幅をみておきます。

発行日については、本を記念式典などで配布・贈呈するのであれば、その日から逆算して締め切りなどを決めていきます。以上のようなことを頭に入れて、まず社内で記念誌編集委員会を立ち上げましょう。作業はそれからです。

ここで調べる

札幌市中央図書館

マイクロフィルムが役に立つ



自分に限らず、様々な調べものをするときに、最も役に立つところ——それは図書館です。札幌市内には四十カ所の図書館や図書室がありますが、その中でも五十五万冊もの蔵書と資料類がそろっているのが札幌市中央図書館。

閲覧、貸し出しは誰でも出来ますが、使い方を覚えておくに役に立つのがマイクロフィルム。古い新聞はこれで見る以外に方法はありません。たとえば自分が生まれた日の出来事を見るなどというときにはお世話になります。記事のコピーも取れるので、使い方は係の人に聞くといでしょう。

- 所在地 中央区南二十二条西十三丁目
- 電話 五二一七三三〇

出版ニュース



句集 山清水

忍昇光



(四六判、上製本)
(286ページ)

自分史を本にするのにも様々なかたちがあります。直

接自らの歩みを述べなくても、折々に発表してきた趣味の作品を年代順に編集することもそうでしょう。

著者は華牙俳句会編集長を務める人ですから、趣味の領域は超えています。昭和二十年代後半から今日までの俳句四百九十句には、家族や時代の状況もくつきりと詠み込まれています。

やうやうに径半ばなり蝸牛昨年、著者七十六歳の一句です。

湖の伝説

中尾トメの肖像

末武 綾子

湖とは登別のクッタラ湖。



(B6判、80ページ)
頒価800円

中尾トメとは八木義徳の小説「俱多楽湖」の主人公、高倉富美子の実在したモデル。この中尾トメに共感を覚えた著者は、大正から昭和にかけての彼女の実像を求めて、数度にわたって登別を訪れ、その時の印象を地域文芸誌などに発表してきました。それらの作品と未発表の一編をまとめたのが本書です。著者の求道的な生き方が伝わってきます。

第1回「本づくり

おしゃべり会

開催



地域の皆さんに本づくりの楽しさを味わっていただくという初めての試み、第一回「本づくりおしゃべり会」が去る六月二十七日、中央区印刷紙工で開かれました。平日ということもあって近隣の五人の住民の方の参加でしたが、一時間半にわたって入門編に触れていただきました。同会は今後も随時開かれる予定です。

- 本づくりの無料相談を承ります。印刷紙工(☎011-561-3597)または編集工房海(☎011-623-6652)までお問い合わせ下さい。
- 5人以上のお集まりで会場をご用意いただければ、日時等をご相談のうえ「出前・本づくりおしゃべり会」に参加します。
- 小紙をご希望の方には、定期的に無料でお送りします。印刷紙工までお申し込み下さい。